

## 奇妙な均衡 — 「エリオット夫妻」小考 —

新井哲男

(平成6年9月30日受理)

### An Odd Triangle in 'Mr. and Mrs. Elliot'

Tetsuo ARAI

(Received September 30, 1994)

1

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の最初の本格的出版物である『我らの時代に』(In Our Time) には、14の短編と第1章~第15章(Chapter I~Chapter XV)と名づけられた15の小品が収められている。冒頭に置かれた短編「インディアン・キャンプ」('Indian Camp')では、医者である父に連れられてインディアン・キャンプに出かけたニックが、インディアンの女性の出産に立ち合い、ジャックナイフと釣り糸による麻酔無し帝王切開という激しい暴力的な出生を目にし、同時に剃刀の刃で喉を切ることにより自らの生を断つという妊婦の夫の激しい暴力的な死を目にする。つまり、この作品は、激しい生と激しい死を目にしたニックの態度と、息子にそのような経験をさせたしまった父親の心の動揺に焦点が当てられている。しかし、それとは別に、妊婦の出産にあたってその村の人たちのとった行動にも興味深いものがある。

早朝の暗やみの中、ニックはどこに行くのかも告げられず、インディアンの漕ぐ舟に乗り、父親の腕に抱かれて、肌寒さを感じながら湖を渡ってインディアン部落にやってくる。同行した叔父のジョージの乗る舟の姿も見えないほどの暗やみの中、聞こえるのはただ叔父の乗る舟のギーコギーコという櫂の音のみで、その音すら舟を漕ぐインディアンの技術の差で、だんだんと遠ざかっていく。ニックは父親の腕に抱かれながらも、不安を感じていたに違いない。作品には、「水の上は冷たかった」<sup>1)</sup>(p. 15)と記されている。

このような気持ちでやってきたニックが、インディア

ン部落で小屋に入り、最初に目にするのは甲斐甲斐しく働く女性たちの姿である。作品には、「村の年配の女性たちのすべてが彼女〔妊婦〕を助けていた。男たちはその場を離れて道路を行き、暗い中で腰をおろし、彼女〔妊婦〕のたてる声の聞こえないところで煙草を吸っていた」(p. 16)と記されている。ニックが小屋に足を踏み入れると同時に、妊婦が陣痛の叫びを甲高くあげる。掛け布団の下がとても大きい。2段ベッドになった上の寝床では、インディアンの夫が煙草を吸っている。部屋全体がとてもいやな臭いがする。いわば、目と耳と鼻と、身体全体からニックは衝撃を受ける。解説や説明で出産を知るのではなく、身体全体の感覚で出産というものを感じ取っているのだ。

しかし、3日前に斧で足に怪我をし、動けないでいる妊婦の夫と、手術の際に妊婦を押さえる役目をするインディアンの男を除いては、この場に男の姿は見えない。村の年配の女性たちが総出で手伝いをしているというのに、男たちはなぜいないのだろう。出産の場に男は必要ないからだろうか。男たちがいても何の役にもたたないからだろうか。いや、それだけではあるまい。現に、手術の手伝いをする男もいるのだ。先にも記したとおり、男たちは、少し離れたところで煙草を吸っていたのだ。では、なぜ作者は、年配の女性たちがすべて出産の手伝いをしてたと記した後で、男たちは少し離れたところで煙草を吸っていたと記したのか。出産に男は関係ないというのであれば、わざわざ煙草を吸う男たちのことを記す必要はなかったのではないか。作者がわざわざ記したということは、作者の観点がそこにも注がれていたということである。つまり、男と女の対比だ。女たちは総出で手伝い、男たちは離れたところで煙草を吸っている。

出産した女は、麻酔無しでジャクナイフによる帝王切開の手術をしたにもかかわらず、出産後は、安らかに眠っている。足の怪我のために、その場を離れられず、2段ベッドの上の段で出産に立ち合った妊婦の夫は、剃刀の刃で喉を掻き切った。帰路の、医者とニックのインディアンの夫の自殺をめぐる会話では、男の方が女よりも自殺しがちであることが示唆される。このように男と女の対比としての観点から、先に引用した文を読むと興味深い。この文には、「彼女の声の聞こえないところで」という文言が挿入されている。この点に注目すると、男たちは、妊婦のたてる金切り声を避けていたことになる。妊婦のたてる金切り声を聞いているのが耐えられないからこそ、その声の聞こえない所に来ているのである。一方では、出産という現実がありながら、男たちは、その現実を直視することに耐えられず、その場を逃げてきているのだ。彼らは、煙草を吸うことで心を休めようとする。

足の怪我のために動けない妊婦の夫も同様である。彼も煙草を吸うことで気を紛らわそうとする。「彼は、煙草を吸っていた。部屋はとてもしやな臭いがした」(p. 16)と記された文からは、この男のひどく苛ついた気持ちが伝わってくる。「いやな臭い」はその場の臭いだけではなく、その場の雰囲気やこの男の心の内部を明確に伝えている。彼は、他の男たちと同様に、できることならこの場から離れたいのだ。できることなら、妻の陣痛の甲高い叫びを聞きたくないのである。出産には、陣痛の叫びはつきものだ。だからこそ、「陣痛の叫びが起るときには、赤ちゃんがこの世に生まれがたり、彼女の方も赤ちゃんをこの世に生み出したいと思っており、彼女の筋肉がすべて赤ちゃんを出産させようとしている時なのだ」(p. 16)という医者であるニックの父のニックに対する説明文が、「いやな臭い」の後に挿入されているのだ。しかし、いくら陣痛の叫び声は出産にはつきものの当たり前のことだと説明されても、医者でない普通の人には、その声は耐えがたい響きを持つ。彼は、医者という科学者の耳からすればごく当たり前の、気にするには値いしない声に耐えられず、その場から逃れたいと願う。今、目の前では、金切り声の伴う出産という現実がある。彼は、その現実から逃れたいと願うのだ。だからこそ、医者が、「こんな声は重要ではないから、俺の耳には入らん」(p. 16)と言った時、現実には背を向けて、「上の段にいた夫は寝返りをうち、壁に向かい合っ

た」(p. 16)となるのである。足の怪我のために動くことができない夫は、その場を離れることはできず、現実には背を向け、壁と向かい合うのである。そして作品の最後では、学会誌に載せても恥ずかしくないほどの大変な手術を成功させ、試合が終わったばかりのロッカールームにいるフットボール選手のように意気揚々とはしゃいでいる医者にとっては全く皮肉な話だが、剃刀の刃で喉を掻き切って自殺してしまうのである。動けなかった彼は、自殺という形で現実を逃避するのである。

この他にも、『*『我らの時代に』*には現実を逃避する、あるいは一時的に退避する男たちの姿が多く見られる。例えば、2番目に置かれた短編「*『医者と医者の妻』*」(‘The Doctor and the Doctor’s Wife’)では、医者であるニックの父が、木材の所有をめぐる雇い人のディック・ボルトンと激しい口論をする。彼は、ディックの嫌味を帯びた挑戦的な言葉に興奮し、怒り、彼らに背を向けその場を後にする。作品には、「彼[医者]は踵を返して立ち去り、丘を上り別荘の方へ歩いていった。彼ら[ディック・ボルトンたち]は、彼の後ろ姿から彼がどんなに怒っているかが分かった。」<sup>2)</sup>(p. 25)と記されているが、「彼の後ろ姿から」という言葉からは、医者の怒りの激しさとともに、医者が現場に背中を向けたことがはっきりと読み取れる。もちろん、この言葉には、現実行動として現場に背中を向けただけではなく、心の内面においても現場に背を向けていることがうかがわれる。

安らぎを求めて家に帰ってきた医者ではあるが、家の中では、妻との確執に悩まされる。今度は、先のディック・ボルトンとの対立とは異なり、上気して口汚く罵り合うことはなく、壁を挟んで静かな口調で行われる。しかし2人の間には強固な壁があり、声だけは聞こえるもののお互いの顔が見えないところで行われる口論だからこそ、口調は静かではあるが、前者にもまして激しい対立となっている。そして、ここでもまた、彼は現実には背を向けることになる。家を出た彼は、梅の森に入る。「こんなに暑い日でも、森の中は涼しかった」(p. 27)と、作品には記されているが、この文は、ただ単に気候について述べているのではない。それ以上に、家という現実社会を後にして、森という大自然の中に身をおいた彼の心の爽やかさを示している。

7番目に置かれた短編「*『兵士の家』*」(‘Soldier’s Home’)にも、主人公の現実逃避願望が見られる。こ

の作品で、主人公クレブスは、帰還兵士として登場する。帰還当初こそ周囲の人たちは、彼を温かく迎えるが、日が経つにつれ、周囲の目は冷たくなる。彼自身、作品冒頭の2枚の写真に暗示されているように、戦争に行く前は、他の人と全く同じ型の衿の服を着ているという型にはまった人間であったのだが、戦地に行ってから軍服に体が入りきれないほどの大きな人間になっている。もちろん、軍服に入りきれないほどの体ということは、実際の身体の大きさだけでなく、内面における心の成長も暗示している。一回り大きくなったクレブスが、故郷に帰還して見たものは、昔と少しも変わらぬ旧態依然たる社会だった。「若い娘たちが大きくなったことを除けば、この町は何一つとして変わっていない」<sup>3)</sup> (p. 71) と作品には記されている。

中でも変わっていないのは、彼の家である。その1つの象徴として車が使われている。作品の筋から言えば、車自体は重要な役割を担っているとは言えない。ともすれば、読み過ぎてしまうかも知れない扱いです。しかし、作品には、「戦争が終わった今、それは依然として(戦争に行く前と)同じ車だった」(p. 71) と記されている。何気なく、しかし明確にこのような文が挿入されていることは、クレブスの家が戦争に行く前と全く変わらない旧態依然としたものであることを暗示している。実際、クレブスの母親は、クレブスが帰還後も長いこと定職を持たず、家でぶらぶらしているのを見ると、クレブスの心情を推し量れないまま、自分の宗教的価値基準を基にした意見を押しつけようとする。母親の言葉のあい間に挟まれた「クレブスは、(彼の朝食用に出された)ベーコンの脂肪が皿の上で固まっていくのを見つめていた」(p. 75) という文は、どんな説明よりも、彼の心をはっきりと表している。この後、彼は、彼の家を、彼の町を出ていこうと決心する。

2

このように、『我らの時代に』には、主人公や他の登場人物たちが現実を逃避し、あるいは一時退避する例が数多く見られるが、彼らが逃避し、退避する現実とはいかなるものなのだろうか。すでに上に述べた2～3の例で暴力や対立、軋轢、葛藤の渦巻く社会という姿がかいま見えるが、本書の9番目に置かれた短編「エリオット夫妻」(‘Mr. and Mrs. Elliot’) から、その姿を更に探ってみたい。なぜならば、この作品には、本書の多くの短

編中に登場するニック・アダムズという主人公が登場していないにもかかわらず、ニック・アダムズが住む現実社会とはこのようなものなのだという現実社会の一面をくつきりと浮かび上がらせているように思えるからである。

「エリオット夫妻」は、“Mr. and Mrs. Elliot tried very hard to have a baby.”<sup>4)</sup> (p. 85) という文で始まる。物語の書き出しとしては、かなり衝撃的な文である。しかも、書かれた時代は、今から70年も前のことなのだ。上の文からは、エリオット夫妻が、子供を持つと躍起になっていたことがうかがわれるが、なぜそれほどに子供を持ちたいのかは書かれていない。子供というのは夫婦の間の愛情の結果として生まれてくるはずのものであるのに、上の文からは、子供に対する言及のみで、夫婦の間の愛情が感じられない。愛という言葉もなければ愛という心も感じられない。ただ機械的に子供を生もうとしているだけなのだ。愛情のない機械的な出産、作品の書き出しの上の文からは、夫婦の間の不毛な、乾いた、殺伐とした雰囲気を読み取れる。

では、この夫婦の間に、不毛な、乾いた、殺伐とした雰囲気を作り上げているものは何なのか。それは、書き出しの文中にも使われた‘try’という語である。しかもこの語は、上に続く2文の中でも、合計3回使われている。つまり、原文を記せば、“They tried as often as Mrs. Elliot could stand it. They tried in Boston after they were married and they tried coming over on the boat.” (p. 85) であるが、作品の冒頭でたたみかけるように繰り返されるこの語が、作品全体に爽りのない虚しさを醸し出している。

しかも、作品の書き出しに続く2番目の文では、‘as often as Mrs. Elliot could stand it’ とまで言っている。‘stand’とは、苦しみに耐えることを意味する語である。3番目の文では、2人がまだ結婚して間もないことが示されているが、結婚とは苦しみに耐えることなのであろうか。彼らは結婚してまだ日が浅いというのに、2人の間に愛情の影は見られず、ただひらすら子供を生もうとするだけで、‘stand’という語からは、夫人にとってはそれが苦痛にさえなっていることがうかがわれる。つまり、2人の間に結婚の喜びは見られず、子供を生むために、ただ耐えている姿が見られるのみである。

では、なぜ彼らはこれほどまでに子供を早く欲しがるのであろうか。推測でしかありえないが、一つには、夫

人が高齢であることが原因として考えられる。船に同乗した人たちの多くが、夫人のことを彼の母親と思ったほどなのである。実際彼女は、40才で、結婚して旅行しはじめると、急激にどんどん老けていったと記されている。

ところで、作者はなぜここで、殊更に“Many of the people on the boat took her for Elliot's mother.” (p. 85) という一文を入れたのであろうか。この一文は、明らかに夫妻の年齢の差を強調して浮き彫りにすることになる。そしてまた、2人の今の関係を暗示しているようにも思える。つまり、形式上は、夫婦であるが、2人の中の心的状況は、母と子のようなものだったのではなからうか。子は母親の言うことを従順に聞くが、一方母親に甘えることも出来る。一方では、妻の言うことに従い、一方では甘える、このような夫婦関係である。この作品を記していた頃、作者ヘミングウェイは、最初の妻ハドリー・リチャードソンと結婚して間もない頃であったが、その最初の妻ハドリーは、ヘミングウェイよりも8才年上の女性であった。また、失恋に終わりはしたが、その前に愛したイタリア人看護婦アグネス・フォン・クロウスキーは、7才年上の女性であり、後に再婚することになるポーリン・プファイファーが4才年上の女性であったことを考えると、この作品の中で、エリオット夫人がエリオット氏よりもかなり年上に設定されていることは興味深い。また、付言すれば、ヘミングウェイが中年になって以降に結婚した女性、つまり3度目の結婚の対象となったマーサ・ゲルホーンと4番目の妻メアリー・ウェルシュがかなり年下の女性であり、『老人と海』(The Old Man and the Sea) 執筆中に恋愛していたといわれるイタリア人女性アドリアーナ・イヴァンチックが30才も年下であったことは逆の意味で興味深い。

さて、先にエリオット氏は夫人に甘える関係にあったのではないかと述べたが、それは、多くの人が夫人のことを母親と思ったという文に続く次の文からもうかがえる。それは、“Other people who knew they were married believed she was going to have a baby. In reality she was forty years old. Her years had been precipitated suddenly when she started travelling.” (p. 85) というものであるが、ここでは、周囲の人たちが生まれると考えているのに、彼らに子供ができない原因を、ただ夫人の高齢に押しつけている趣きがある。最初の文は、彼らが子供を生まなければと焦る強迫観念の裏側に周囲の目を気にする彼らの意識があ

ることを暗示するが、それに続く彼女の高齢や、身体の衰えを強調する文は、夫の側の身勝手な考えを示唆するものでもある。

この考えは、上の文に続く第2パラグラフにも受け継がれている。“She had seemed much younger, in fact she had seemed not to have any age at all, when Elliot had married her after several weeks of making love to her after knowing her for a long time in her tea shop before he had kissed her one evening.” (p. 85) ここでは、パラグラフの最初から、彼女の年齢のことが言われ、結婚前は彼女がずっと若く見えたことが強調される。つまり、結婚前はずっと若かったことが強く強調されればされるほど、その裏では、現実には、結婚してみると彼女はとも老けていたことが強調されていることになる。そしてここでは、この章の冒頭で筆者が述べた2人間の愛情が、‘making love’ という語句で述べられている。筆者が、作品の書き出しの数行の中に見いだそうとして見いだし得なかったのは、この‘making love’ という語句である。しかし、作品の最初のパラグラフには、この語句はなく、‘try (to have a baby)’ という語のみが繰り返されていた。第2パラグラフにおいて、ようやく‘making love’ という情が描写されるが、2人の中にこの情が交わされたのは、結婚前のことである。結婚前に関しては、お互いに口づけを交わしあい、愛しあいと2人の激しい愛が語られるが、結婚後には、彼女の年齢のことばかりが語られる。そして、もちろん、作品でこのことが多く語られるということは、夫がこのことに関してひどく気にかけていたことを暗示する。

エリオット氏は、ハーバード大学という超一流大学の法学部の大学院に仕事をもち、一方で詩も作り、しかも短時間でとても長い詩を作り、詩作で年に1万ドルも稼ぐという学者であるが、作者は、年齢の差という、結婚の持つ本質とは無関係なことに拘泥する、頭ばかりが大きくなったインテリ学者を暗に批判しているとも言える。おまけに、彼は25才で、彼女と結婚するまで女性とベッドをともにしたことはない。作者は、“He wanted to keep himself pure so that he could bring to his wife the same purity of mind and body that he expected of her.” (p. 85) と記し、更に「彼は、これまで何人かの女性と付き合ったが、必ず自分は純潔を通してきたと告げることにし、それを告げると、女性たちは皆彼に

対する興味を失うのだった」(p. 85)と述べ、また「女性たちがふしだらな男だと知りながら、そういう男と婚約をし、結婚していくのを見ると衝撃を覚え、本当に驚愕した」(pp. 85-86)とも記している。なるほど、道徳的には、倫理的には、申し分のない立派な男であるが、戦場での戦いに生命をかけ、アフリカでの猛獣狩りに生命をかけ、大海原での大魚との戦いに生命をかける男たちを描いた男にとっては、この様な男はどう見えるだろうか。上の文は、むしろ‘he’と‘she’を入れかえ、男と女を入れかえた方が普通ではないのか。作者が、わざわざこれらの文をここに記したということは、ともすれば男女の役割が逆転しかかっている高度に文明化された現代社会に対する揶揄の表明ではないのか。男といえば、大自然の中を駆け巡り、魚を釣り、獣を狩る攻撃的で、野性的な生き物ではなかったのか。ヘミングウェイは、男が本物の勇気を持ち、本物の男となることを描いた「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(‘The Short Happy Life of Francis Macomber’)の中で、狩猟ガイドのウィルソンに「彼らの中には、50才になってもまだ大人になりきれない奴がいる。偉大なる、アメリカ人の大人子供というやつだ」と述べさせている。<sup>6)</sup>偉大なる学者エリオット氏は、文明化された社会では、大金を持って外遊する成功者ではあるが、野性味を失い、男として成長しきれない、まさに「偉大なる大人子供」と言えよう。ここにいたって、冒頭のパラグラフで、作者が記した「母と子の関係」の意味が明確になってくる。

夫人はかつて、彼が純潔を守ってきたことを告げた時、“You dear sweet boy,” (p. 86)と言う。ここで‘boy’という語が使われていること自体、夫人と氏との関係に母子関係の要素が含まれていることを連想させる。そして、彼女はたびたび、彼に、彼が純潔を守ってきたことを言わせ、その度に彼女は喜ぶが、この行為は男女の関係の逆転を思わせる。

そもそも彼は、最初、彼女と結婚する気はなかったのだ。自分でも気づかぬうちにいつしか結婚してしまっていたのだ。作品には、“He could never remember just when it was decided that they were to be married. But they were married.” (p. 86)と記されているが、結婚という人生における一大事を自分で決めることのできない現代人のひ弱さ、状況の流れるままに身を任せ、しっかりとした自分というものを確立できない臆病な弱い男の姿が浮き彫りにされている。

男のひ弱さ、小児性に対する揶揄は、新婚初夜の晩の2人の行為の描写にも表れる。彼らは2人とも失望して、夫人は寝てしまう。夫は、‘his new Jaeger bathrobe that he had bought for his wedding trip’ (p. 86)を着て、ホテルの廊下に出る。夫の着ている化粧着は「新しい」もので、「新婚旅行用に購入された」ものであることがわざわざ記されている。ここには純潔を守り通してきたことを誇りとする夫の結婚に対する熱い期待感と、それを眺める作者の冷たい視線がうかがわれる。そして、ここでもまた男と女の逆転である。ちなみに夫人の服装に関しては、何も述べられていない。

廊下に出た夫は、各部屋の前にスリッパが2足づつ、つまり大きいスリッパと小さいスリッパが1足づつ並べられているのを見る。再び、彼は胸の鼓動を激しくし、急いで部屋へ戻る。しかし部屋へ戻った彼が目にするのは、眠っている夫人の姿である。彼には、彼女を起こす勇気はない。作品には、“He did not like to waken her and soon everything was quite all right and he slept peacefully.” (p. 87)と記されている。この‘peacefully’には、作者の最大の皮肉が込められているのではなからうか。

ところで、彼は、詩を作るのはとても速かったが、間違いにはとても厳しく、1つでも打ち間違いがあると夫人に全原稿をタイプし直させた。この点に関し、作者は次のように記している。“He was very severe about mistakes and would make her re-do an entire page if there was one mistake. She cried a good deal and they tried several times to have a baby before they left Dijon.” (p. 87)ここで夫人のあげる「叫び」(cry)は、タイプを打ち直す労苦に対する叫びと、子供を生もうとしてベッドであげる叫びとが渾然と一体化している。つまり、何事も慎重で、一つの間違いも許さない潔癖主義の彼ではあるが、子供を生むということだけは、彼の計算どおりには進まないという冷やかな皮肉が、上のタイプを打ち直させる文と子供を生もうと努める文とが対比的に並べられたことの中にはうかがわれる。

皮肉といえば、エリオット夫人の名前は、コーネリアという。コーネリアといえば、紀元前170年頃に生き、2人の子供を宝としていたローマの婦人を思い起こさせる。<sup>7)</sup>そのコーネリアがどうしても子供ができないというのであるから、これはひどい皮肉である。そして、夫人の名前がコーネリアであることが紹介される作品の中

盤以降、一人の女性としての‘Cornelia’とエリオット氏の妻としての‘Mrs. Elliot’の語が慎重に使い分けられる。

ある時、彼女はエリオット氏を説き伏せて、ボストンから彼女の女友達を呼び寄せる。エリオット氏を説得する時の彼女はもちろん‘Mrs. Elliot’である。夫人としての優位性、夫人としての強い立場で彼に迫るのである。やってきた女友達と彼女との関係は次のように記される。“Mrs. Elliot became much brighter after her girl friend came and they had many good cries together. The girl friend was several years older than Cornelia and called her Honey.” (p. 87) 女友達がやってくると、夫人としての彼女は、前よりもずっと明るくなる。しかし、女友達と一緒にいる時は、夫人としてではなく、個人のコーネリアとして存在している。その時の彼女を女友達は、‘Honey’と呼ぶ。‘Honey’とは、もちろん恋人同士が使う言葉である。何やら意味ありげな2人の関係が浮かび上がる。この点を考慮に入れると、前の文で2人が一緒にあげた‘many good cries’とは、ただ単なる楽しさゆえの叫び声ではないことになる。

彼ら3人は、ツレーヌの別荘を借りて、そこで一夏を過ごす。友達はたくさんいたが、皆帰ってしまい、彼らだけが残る。エリオット夫妻は、相変わらず子供を作ろうと努める。夫人は、タイプを習い始め、スピードが増すと、それだけ間違いも多くなることを発見する。今では、女友達が実質上すべての原稿をタイプしている。彼女はとてもきれいで上手にタイプし、タイプすることを楽しんでいるように見える。

ここでもまた、夫妻の子供を作ろうとする作業とタイプを打つ作業とが並行して記されているが、タイプを打つスピードが増すとそれだけ間違いも多くなる事を見つけたという文は、子供を生む作業においても回数が多ければ良いものではないことを連想させる。また、女友達が実質上すべての原稿をタイプしたという文は、エリオット氏の夫人としての座は、実質上彼女が奪っているのではないかということも連想させ、更に、彼女はとてもきれいで上手にタイプし、タイプすることを楽しんでいるように見えたという文は、エリオット氏も女友達も今の状況をお互いに満足しているようだと感じられる。

エリオット氏は、今では、白ワインを飲み、皆から離れて一人で自分の部屋で暮らしている。夜には詩作に耽り、朝には疲れ切った顔をしている。夫人と女友達は、

今では大きなベッドと一緒に眠り、たびたび一緒に叫び声をあげる。結婚している夫婦が普通に行う夜の行為で疲れ切るのではなく、詩作で疲れ切り、朝には憔悴した顔をしているということは、まさに文明人ならではの悲劇である。「疲れ切る」という語が、‘tired’ではなく‘exhausted’が使われているところに、彼の憔悴感が一層強く感じられる。また、夫人が夫を相手にではなく、女友達を相手に声をあげているところに現代の歪みが感じられる。作品は次の文で締めくくられる。

In the evening they all sat at dinner together in the garden under a plane tree and the hot evening wind blew and Elliot drank white wine and Mrs. Elliot and the girl friend made conversation and they were all quite happy. (p. 88)

夫は、赤ん坊が飲むミルクを思わせる白ワインを飲み、相変わらずの小児性を感じさせるが、夫人は‘Cornelia’ではなく、Mrs. Elliotとして、表面上の夫人の座を確保し、女友達と仲睦まじく会話している。こうしてみんな幸せだったのだ。ただ単に幸せなのではなく「とても(‘quite’)」幸せだったのだ。

## 3

ヘミングウェイは、アイロニーに溢れた目で、インテリ学者を見つめ、女性同性愛者を見つめ、現実世界を見つめている。この作品では、実質的には、夫婦生活は壊れてしまっているものの、奇妙にも女2人男1人でうまく均衡がとれ、「幸せに」暮らしているインテリ学者の夫妻が戯画的に描かれている。しかし、この世の中で戯画的生活を送っているのはこの夫婦だけではない。『我らの時代に』で次に置かれた作品「雨の中の猫」(‘Cat in the Rain’)や「季節はずれ」(‘Out of Season’)でも心にすれ違いの生じている夫婦が描かれている。夫婦生活が壊れてしまっているのは、インテリだけではないのだ。高度に文明化した頭だけが大きい現代社会では、あそこでもここでも夫婦生活は実質的には壊れている。壊れているのは夫婦生活ばかりではない。現実社会には、いろいろな暴力・葛藤・軋轢が渦巻いている。ヘミングウェイの作品に登場する多くの男たちは、そうした現実には背を向け、逃避し、一時退避するのである。まさに

「我らの時代」は直視したくない汚いもので溢れている。「季節はずれ」に続く「国境の町」(‘Cross-Country Snow’)でも、主人公ニックは、ジョージと男同士でスキーを楽しみながら、出産をまじかに控えた妻のことを思い出し、その妻の元へ帰らなければならない日が近いことを考え、顔を曇らせる。

「エリオット夫妻」は、女友達がやってきて3人で一緒に暮らすことにより、奇妙にも均衡がとれ、3人が共に「幸せな」生活を送るという作品である。この作品は、アイロニーに溢れ、戯画的に描かれているが、たとえそうであるにせよ、見方を変えれば、エリオット夫妻は、一夫一婦制という文明が生み出した産物に背を向けて、女友達を入れ込んだ奇妙な3角形を作ることで「幸せな」生活を手に入れたといえる。本稿で見てきた通り、1925年に出版された本書では、2人の夫婦生活は、かなりの皮肉をもって描かれている。しかし、ヘミングウェイの死後、1986年に出版された『エデンの園』(*The Garden of Eden*)で、男1人女2人の共同生活が再現され、そこではこの生活がかなり好意的に扱われている。このことを考えると、1925年時点では、まだ成熟してはいなかったにせよ、ヘミングウェイの心の中には、同性愛者を入れ3人で暮らすことによる生活を、ニックの父が「医者と医者妻」で大自然の残る森に入って憩いを得たことに似た、文明社会から逃れ安らぎを得るための一つの方策として認める気持ちが、どこかにあったのかもしれない。このように考えると、「エリオット夫妻」は、ただ単に現実社会の持つ醜悪な一面を描いたということにとどまらず、文明化された社会を嫌い、原始的なるものに憧れる作家の本質がよく滲みでた作品といえよう。

注

- 1) Ernest Hemingway, 'Indian Camp,' *In Our Time* (New York; Charles Scribner's Sons 1958), P. 15. 以下、この作品からの引用および頁数はこの版による。
- 2) Ernest Hemingway, 'The Doctor and the Doctor's Wife,' *In Our Time* (New York; Charles Scribner's Sons, 1958), P. 25. 以下、この作品からの引用および頁数はこの版による。
- 3) Ernest Hemingway, 'Soldier's Home,' *In Our Time* (New York; Charles Scribner's Sons, 1958), P. 71. 以下、この作品からの引用および頁数はこの

版による。

- 4) Ernest Hemingway, 'Mr. and Mrs. Elliot,' *In Our Time* (New York; Charles Scribner's Sons, 1958), P. 85. 以下、この作品からの引用および頁数はこの版による。
- 5) Ernest Hemingway, 'The Short Happy Life of Francis Macomber,' *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York; Charles Scribner's Sons, 1964), P.150. 原文は、"...some of them stay little boys so long, Wilson thought. Sometimes all their lives. Their figures stay boyish when they're fifty. The great American boy-men."である。
- 6) コーネリア (Cornelia) に関して、『英米文学辞典』<第3版> (斎藤勇監修、西川正身・平井正穂編、研究社、1985年発行、270頁)には、次のように記されている。「有名なローマの賢夫人。'Mother of the Gracchi」と呼ばれる。Scipio Africanusの娘で、Tiberius Sempronius Gracchusに嫁し、のちに護民官となった2子TiberiusとCaiusをあげ、夫の死後、苦難に耐えて育てた。宝玉を誇る婦人に、その2人の子を示し、これが自分の宝玉だと言ったという。」

参考文献

- 石一郎編『ヘミングウェイの世界』荒地出版社 1970  
 今村楯夫『ヘミングウェイ—喪失から辺境を求めて』冬樹社 1979  
 嶋忠正『ヘミングウェイの世界』北星堂書店 1975  
 高村勝治『ヘミングウェイ』研究社出版 1971  
 瀧川元男『ヘミングウェイ再考』南雲堂 1972  
 Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. London: Collins, 1969.  
 —. *Hemingway: The Writer As Artist*. New Jersey: Princeton University Press, 1972.  
 —, ed.. *Ernest Hemingway Selected Letters 1917—1961*. New York: Charles Scribner's Sons, 1981.  
 Benson, Jackson J., ed.. *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Durham, North Carolina: Duke University Press, 1975.  
 Defalco, Joseph. *The Hero in Hemingway's Short Stories*. Pittsburgh: University of Pittsburgh

- Press, 1968.
- Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1969.
- Kert, Bernice. *The Hemingway Women*. New York • London: W. W. Norton & Company, 1983
- McCaffery, John K. M., ed. *Ernest Hemingway: The Man and his Work*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1969.
- Plimpton, George. 'The Art of Fiction: Ernest Hemingway, ' *Conversations with Ernest Hemingway*. Matthew J. Bruccoli, ed.. Jackson and London: University Press of Mississippi, 1986.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*, New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1966.

### An Odd Triangle in 'Mr. and Mrs. Elliot'

#### Synopsis

Many of the men in *In Our Time* written by Ernest Hemingway in 1925 turn their back on the sophisticated and civilized world and wish to be away from it. Hubert Elliot in 'Mr. and Mrs. Elliot' is no exception.

Mr. Elliot and his wife try very hard to have a baby but in vain. They come to put on a distant air. She asks her husband to agree that her girl friend comes to stay with them. After the girl friend comes the wife becomes much brighter and happier. Mr. Elliot and the girl friend are quite happy, as well.

What has estranged the husband and the wife from each other? And why do they all come to be happy in the end? This paper offers an analysis of these questions with frequent reference to the sophisticated and civilized world of today.